

西南学院大学  
図書館報

読んでほしいこの1冊！

- 横川和男・高橋文彦・藤丸孝幸ほか 2~4  
 交換教授を終えて……………小熊和郎 5  
 気楽に読める専門書……………西野宗雄 6  
 図書館勤務21年を振り返って……今永義純 7  
 お知らせ・報告・編集後記…………… 8



## 読書の姿勢

文学部教授 大森 衛

情報化時代、国際化時代、その他さまざまに現代は呼びなされているが、時代の変化がそのテンポを加えているのをみれば、この面でもますます多様化が進むのはまず疑いない。

一般に現代社会における書籍刊行数の飛躍的な増加は、書店が売場面積で大型化を競う現象に端的に反映している。これには情報の質量両面における多様化が、従来の書籍の形に納まりきれぬまでに進んだことも手伝っている。ここにも現代の、少なくとも日本の社会に見られる飽食・飽和の状況がある。これも文化隆盛のしるしとして、まずは祝って良いだろう。

しかし、私たちは、そのような情報の、そして書籍の氾濫の中で喘いでいるという状況はないだろうか。真に自身の成長に資する書物ならば熟読玩味に値するし、また熟読玩味しなければならぬはずである。けれども現実には、気ぜわしく次々に書物を読みあさり、したがって書物の折角の内容も、定着することなく通り抜けて行くことがないだろうか。そんな悠長なことを言っているのは、現代社会では間尺に合わぬと反駁する向きもあろうが、そんな反省をあえて試みたい気がする。

いま私は19世紀アメリカの哲人R.W. エマーソンを念頭において書いているのだが、彼の読書はギリシア、ローマの昔から洋の東西にわたっている。単に読書の幅と量を問題にするとす

れば、彼に匹敵する人物は珍しくないかも知れない。しかし、エマーソンについて感心するのは、自己の思想の形成と人格の成長に資する書物をほとんど本能的にかぎ分けて選び取っている点である。そしてそれらを、ピューリタンの末裔にふさわしい厳格さで彼が日課とした、午前の読書、午後の散策と瞑想を通して、精神の血肉と化した点である。熟読玩味とは、正に彼のような読書態度をいうのであろう。この態度が彼をして、時代の突出した思想家たらしめたのである。

洋の東西を問わず、卓越した思想家というものは、多かれ少なかれエマーソンの読書態度に近いものを示したはずである。エマーソンは、たしかに古き良き時代に生きた。しかし、彼の読書態度は、同時代の万人のものではなかった。ましてや、多くの場合の現代人の読書態度からは遠いだろう。たしかに単なる情報の獲得や娯楽のための読書ならば、それもよろしかろう。しかし、自身の人格の成長にプラスする、いわば人生の書については、エマーソンの姿勢がなければなるまい。ただし、関心の在りかが異なれば、熟読玩味すべき書物もまた異なるはずである。願わくは、学生諸君が、真に熟読玩味に値する書物を、人生の早い時期に、1冊でも多く見出し、永く座右の書とされんことを。

(おもしろい まる：アメリカ文学)

★★★ 読書の秋 ★★★★★

## 読んでほしいこの1冊!

### 『ゼロサム社会』

レスター・サロー著

経済学部講師 横川和男

この本は70年代から問題になって来たインフレーション、エネルギー問題、生産性の伸びの鈍り、所得分配の不公正等米国経済の諸問題を解決するのが何故むずかしいのかを論ずる。著者は解決策が無いのではなく、どの策も社会の誰かに不利益を及ぼし、誰もが自らに降りかかる不利益に強く抵抗するからだと説く。ゼロサム社会とは皆が不利益の押し付け合い、パイの分捕り合戦をしている様を指す。

しかし実は、この本の面白さはこの指摘よりも、これらの問題を扱って、通り相場となっている常識をくつがえしていく著者の論理の切れ味や我々の意表を突く観点にある。売上げが落ちれば当然策を施すであろう企業家がインフレ下では金額上の売上げは伸びるので、台所が苦しいのをとにかくインフレのせいにし勝ちである、等々。

これは大きな問題意識を基に書かれた警世の書であるが、著者の語り口は冷静、かつ機知に富んでいて、軽妙でさえある。皮肉を交えながらの、アメリカ人の仕事、金銭、政府等についての考え方の記述は読んで面白く、我々には示唆にも富む。

硬くもあり、軟かくもあり、寝ころんで読みながら考えさせられる事の多い本である。

(よこかわ かずお：国際経済学)

### 『忘れられた日本人』

宮本常一著

法学部講師 高橋文彦

庶民と呼ばれる人々が死んでしまったのはいつのことだろう。日本の村が減びてしまっから、もうどれぐらいになるだろう。昔を語る老人たちがいなくなってから、幾星霜を重ねたことか。いつのまにか日本は「チューサン階Q」だらけになってしまった。

ローンで家や車を買ったり、ツアーで海外旅行することが、「幸福」の定義ではなかった時代、所得倍増のために国の隅々までアスファルト舗装される以前の、日本がまだ美しかった時代、あちこちの町や村にはホンモノの庶民が暮らしていた。民俗学者の宮本常一はそんな日本の辺境をくまなく歩いて、庶民たちの生きた言葉を記録した。彼は道端のお堂で観音講の老女たちと語り合い、民家の軒先で古老の話に耳を傾けた。庶民の生活はインテリの「道徳」とは無縁である。例えば、「土佐源氏」の語る80年の生涯。この博労くずれの盲目の乞食は、視力を失うまで、人をだまし、女をかまうことだけで過ごしてきたというが、彼の生きざまは不思議に潔いのである。

夜中にネットワークにアクセスする孤独なパソコン少年たちよ。君たちは、夜這いのために4里も離れた村まで山を越えて行く若い衆が、羨ましくないのか。鏡ばりのエアロビクス・スタジオで飛び跳ねる神経症気味の主婦たちよ。あなたたちは、青空のもとで田植をしながら大声でエロ話をする農婦たちよりも、果して幸せなのか。

(たかはし ふみひこ：法哲学)

## ★★★ 読書の秋 ★★★★★

## 読んでほしいこの1冊!

## 『やけたトタン屋根の上の猫』

テネシー・ウィリアムズ著

教務課 藤丸孝幸

ウィリアムズの戯曲は今まで数限りなく舞台で上演され、またそのほとんどが映画化されて好評を博している。この人気の秘密は何か。

とにかく彼の作品は文句なく面白いのである。性的あるいは暴力的な要素を含んだショッキングな内容に加え、構成の緻密さ、セリフの迫真性、人物描写の巧みさなど、美点を挙げれば切りがない。

私の好きなこの作品では、一組の夫婦——親友を失って以来酒浸りになった夫ブリックと、無気力な夫に満たされず、“やけたトタン屋根の上の猫”のように苛立った日々を送る妻マーガレット——の葛藤と、癌で死期の近い父親の財産相続をめぐる兄夫婦との確執に満ちた家庭劇とが、実にうまく交錯している。また、第二幕後半、自分が癌だと知らなかった父親と、友情を不潔な同性愛と決めつけられたブリックとの“対決”場面の迫力も相当なものだ。

秋の読書向きという点では、抒情性に満ちた傑作『ガラスの動物園』にも惹かれるが、エリア・カザンにでもなった気分で「ここは語気を強く」などと、一人で悦に入ってしまうような熱い夏のドラマの面白さはやはり捨て難い。

また機会があれば、マーガレット役のエリザベス・テイラーが信じられない位美しい映画版も是非ご覧いただきたい。

(ふじまる たかゆき)

## 『避暑地の猫』

宮本輝著

国際文化学科3年 明永勝也

この本は、今夏『優駿』が映画化され、話題になった宮本輝氏の作品です。こちらの方も先頃テレビ化され、見た方もいらっしやると思います。私もテレビ化されたものを見ましたが、原作の複雑さを表現しきれておらず、物足りなさを感じました。テレビを見てあまりおもしろくないと感じた方は、是非原作を読んでほしいと思います。

物語は、軽井沢のある別荘を舞台に、その持主である一家と、別荘の使用人である一家の異常な関係を軸に、人間の心の奥底に潜む悪魔を描いたものです。誰の心の中にも悪魔は潜んでいます。普段は全く顔を見せませんが、何かの拍子に、悪魔から心の中を占領されてしまうこともあるのではないのでしょうか。ひょっとすると、この物語の二つの家族の人々のように、悪魔に心の中を占領され、獣のようになった人間が、人間の本当の姿なのかもしれません。普通は、化けの皮を被って人々は生活しており、他人の悪事を侮蔑の眼で眺めているのかもしれません。悪を肯定する気はありませんが、ある一面では、悪によって人間の根本的存在が認められるのではないかと思います。

秋の夜長にこの本を読んで、人間の心の中に潜む悪魔について考えることも有意義だと思えます。

(あけなが かつや)

## \*\*\* 読書の秋\*\*\*\*\*

## 読んでほしいこの1冊!

## 『アメリカの家族・日本の家族』

増田光吉著

児童教育学科3年 浅田和彦

経済面にしても社会面にしても、日本の状態を知る為によくアメリカが引き合いに出されてきました。それは、日本にとってアメリカが関係の深い国であり、外国の中では身近に感じる国だからではないでしょうか。

経済的なレベルでのアメリカとの比較はよく耳にしますが、この本では社会の基本的な単位である家族に焦点をあてて、日本とアメリカを比較したものです。

例えば、アメリカでは飛行機が目的の空港に着くと、奥さん達はハンドバッグ一つの身軽さで席を立つ。その後をご主人連が手まわり品をもってついてくる。子連れの場合、子どもの面倒をみるのもたいていは夫である。これが日本だと母親が赤ちゃんをおんぶし、上の子の手を引いて、おまけに腕に荷物をかかえるといった具合になる。この違いだけをとり上げると、アメリカはレディーファーストの国であり、対する日本は男尊女卑が強い国だと思われがちです。ここではそうした違いの良し悪しを論じているのではなく、どうしてそのような違いがあるのかという双方の社会的文化的背景が述べてあるので、双方の実像がよくわかります。

この本は先生から勧められた本を読んだもので、なかなかおもしろかったです。みなさんもぜひ読んでみて下さい。

(しぶた かずひこ)

## 『水の惑星』

—地球と水の精霊たちへの讃歌—  
ライアル・ワトソン著 内田美恵訳  
ジェリー・ダービシャー写真

外国語学科3年 中田垂紀

ちょっぴり感傷的な季節がやってきました。皆さんは秋の夜長をどう過ごされていますか。ちなみに私は、部屋で一人、BGMに「水の中のオアシス」をかけながら静かにこの本—『水の惑星』を開きます。

この本は、全体がI.水と大地、II.水と生命、III.水と科学、VI.水と歴史の四部から構成されていて、地球と水の成り立ちの話から人間と水との関わりまで大変分かりやすく読みやすく描かれています。コロラド川、グランド・キャニオンの滝、氷河などの自然の中の水の姿から、何とアメンボ、人間の涙まで美しい写真がふんだんに盛りこまれており、ライアル・ワトソンさんの詩的なメッセージと相まって、それこそ写真に吸いこまれてゆくように目が離せません。ではここで彼から一言。

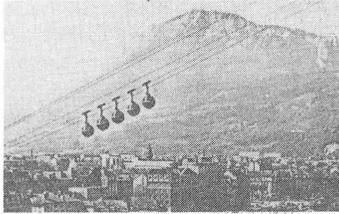
「水は新鮮である。水はじかにわれわれを支え、心を慰め、あるいは鎮め、渴きをいやしてくれる。水は心に平和と夢想をもたらす。水は甘味にしてやさしく、我々の痛みを和らげるのがその本分だ。」

忙殺される毎日の中で、悩んで悩んで心がガサガサになることってありますよね。そんなときに心を広くゆったりと、又清流のようにやさしくしてくれるのがこの本なのです。

「心のオアシス」の本として、どうぞ。

(なかた あき)

## 交換教授を終えて



文学部助教授 小熊和郎

グルノーブル大学の図書館のことなどを書いて下さい、と言われてうっかり引き受けてしまったものの、実は文学部（第三大学）の図書館に足を運んだことは数度しかない。日本語教員としての職業意識で、赴任早々、日本関係の書物がどれ位揃っているかを調べに行き、今まで見たこともない恐しく古い仏和辞典があることや、分類基準が「日本」でなく（あたり前だが）日本の様々な側面を知りたい初学者は「歴史」「政治」「経済」等々の中から探さねばならず大層不便であろうこと、大体入れているという司書の方の話にもかかわらず、日本文学の翻訳書にも随分欠けたものがあること、等を「発見」してこの探険は終わったのでした。

幸い、国際交流基金の援助で前年度から日本語教材を送ってもらったり、大学を通じてフォンダシオン・ドゥ・フランスからの予算でフランス語の日本研究書を相当数購入でき、これらは将来の日本語科図書の一部になるはずで、図書の選定には大手の本屋フナックや民間の文化団体エスパス・ジャポンの文献目録が役に立ちました。

年が明け、授業も軌道に乗り出した頃、J-F. Sabouret 編、L'Etat du Japon(日本の現状)、éds. La découverteという、日常から世界の中の日本まで多岐に渡るテーマを簡潔に要領よくまとめた画期的な事典が出版され、学生には必ず参照するように推薦することができました（因に、100人以上の執筆者の中には本学の元留学生、

デュモラル君の名前も見える）。非常に精密な文献案内を含む本書は、語学の勉強に疲れて、日本文化の話させがむフランスの学生を前に困惑気味の教師には大きな武器になったものです。4月末に私達がグルノーブル市内で開催した「日本週間」には、同書に執筆している宗教学の J-P. Berthon、経済の F. Guelle、文学の C. Sakai、日本語教育の C. Garnierの各氏他、若手研究者を講演にお願いしたのですが、熱心な質疑応答もあり、学生にとっては日本語学習への意欲を新たにかきたてる刺激になったようでした。

最後に、私事になりますが、1才過ぎの息子を連れての生活だったために、大学の図書館には行かなかった私も、市内の子供図書館（空中ケーブルの出発点の市立公園内にある）には楽しく通うことができました。校区ごとに設けられたこの図書館は、丁度大きな子供部屋のようにテーブルやクッションが配列してあり、子供達は魅力的に作られた空間をいわば遊びながら（階段を登った中二階に遊び専用の部屋もある）本が読めるのです。図書館は、本を読んだり借りたりするだけの場所ではないのだなあ、と感心しました。開館は小学校のひける午後3時40分、外国人でも誰でも住所と子供の名前さえ記入すれば利用できます。但し、月曜日か休みという大人社会の原則はここでも適用されていました。

（おぐま かずろう：フランス語学・日本語学）

気楽に読める専門書〈9〉

# 『アメリカ企業家精神の旅—大企業時代の終り—』

日経ビジネス編 日本経済新聞社発行

商学部商学科主任 西野宗雄

大学でケイザイやビジネスのことを勉強しようかな、という気持ちが、どこで、どんな風に芽ばえて、それから、その気持は、いま現在、学生している20歳あたりの青年のなかで、どんな形になっているのだろうか。

ほとんど全部といってよいほどの学生たちは、卒業前の一年間で、あれこれの既存の会社企業に就職することに取り組み、卒業後はカイシャで働く給与所得者になってゆく。

そういうことから見ると、「サラリーマンは気楽な稼業ときたもんだ」なんて考えられない時節であろうけれども、より生きるためにはなにかから始めてみなくてはならないということなんだから、さしあたり、できるだけ有名なカイシャに就職することが確実、ということが大勢の判断なのであろう。

しかし、そういう大勢派は、そんな感じ方は実は自分自身という個人を自分で制限してしまっているんじゃないかという疑問さえ抱かないのだろうか。そうだったら、かれらにとって、例えばケイザイやビジネスについてのセンセイ達の講義を聞くのもいささか退屈というだけでなく、ウックツ（我がワープロはこの漢字は知らず）の極み、ということになるのは自明であらう。あの単位なるものを取らなければならないのだから。

身を入れる！学生している時期に、どうしたら、ケイザイやビジネスのお勉強に、ほんとに打ちこめる？

私の考える有力な答えの一つ。それは、なにをはさておきここで、まだまだ柔らかいはずのその意志的精神の領域で、自分は決して、大勢派がおもむくがごとく、長い長い職業人生活を

普通の一介のサラリー・パーソン（女子も含むのです）で終わらせるってなことにはしないゾツ、とまあこんな風に、さしあたり断固として決意してみることです。

そういうことである。そういうわけであるから、いつか将来には個人またはグループで新しいタイプの企業を起こすという企画を、ただ紙と鉛筆と自慢の頭脳を使って幾つも幾つもしてみてもどうだろうか。

そんなこと言ったって…と、反発したり無視したい大勢派の学生は、ともあれ1200円を出しなさいって。ここで紹介する『気楽に読める専門書』を買って、それこそパラパラでいいから、居ずまいを正さなくてもいいから、ともかく読んでみて欲しい、と思うのである。

本書は、アメリカのビジネス風土をなりたたせている核であるその企業家精神の現在の姿についての生き生きしたレポートである。（私としては、あのソ連や中国などでこれから企業家精神がどんな形で登場してくるのかにも、おおいに注目しているのであるが。）

本書によれば、かのアメリカの地では、1960年代は抗議と改革の時（日本もそうだった）、70年代はなにかと無意志的なLet it beの時（この国もまあそうだった）、しかし、80年代は起業＝金儲けビジネスの時になった、ということである。（ある意味では残念と言わずにはおれないが日本の今の青年たちは起業時代をつくりえず、70年代感覚にいっそう浸ってしまっている？）

そういうわけである。本書から何かを学びとれる学生は案外多いと、私としては思いたいのである。

（にしの むねお：商学部助教授）

# 図書館勤務21年を振り返って

国際交流事務室長 今 永 義 純

この10月から、約21年間勤めた大学図書館を去って、国際交流事務室に移ることになった。私が勤め始めた昭和42年ころの図書館は、今の大学院棟にあり、当時丁度現図書館の建築が進んでいたころである。翌43年に現図書館が完成して、夏休み中に図書の大移動をしたことを憶えている。このようなわけで、私の西南学院での勤務は、ほぼ現図書館の歴史と同じくしている。この年、国連より国連寄託図書館の指定を受け、国際化へ向けて開かれた図書館としてのスタートをきった。翌年には、E C、O E C Dからも認可を受け、国際機関の情報センターとしての機能も徐々に整ってきていた。

40年代の後半になると、図書館界にも情報化時代に対処するため、電算化の波が押し寄せ、一つ二つとコンピュータを導入する館が始め、その事例報告等におおいに関心を持ったものである。本学図書館においても、見よう見真似の手探りの状態で取組み、51年雑誌の受入管理業務を手始めに、その後整理、閲覧と部分的に電算化を行ってきたがこれにも限界があった。

すなわち情報の量と質に対応するためには、もはやトータルシステムでの電算化以外に対処できないという状況となった。オンラインによる情報検索システムの導入を皮切りに、専用の電算機を導入して、トータルシステムでの電算化を図ることが大学の方針として決定し、61年7月に全学的に組織された機種選定委員会が発足した。その後、当委員会において、導入する電算システムを鋭意検討し、このほど決定したところである。

他方、増えつづける一方の図書に、物理的スペースが狭あいとなり、ここ数年その対応に追われてきた感がある。電算化の検討と相俟って増・改築の検討も進められ、現在66年度の完成を目前に具体的な検討が行われている。最近の図書館建築は、規模、設備、機能面等あらゆる面からよく考慮されたその方面の専門の設計によるものが多く見うけられる。本学図書館においても、利用者のための図書館という本来の存在意義を十分認識した増・改築が行われることを期待する。

このように、大学図書館の抱える重要な課題である電算化、増・改築とも緒についたばかりであり、これからの正念場を迎えることになる。これからの図書館は、所蔵の資料についての情報だけでなく、所蔵の有無に関係なく、利用者の要求している資料についての情報を提供する、という情報センターとしての機能が益々重要視されてくると思われる。そういう意味からして、ただ単に自館が収集する資料を整理、保存、提供するシステムばかりでなく、広く国・内外と情報ネットワークを結び、必要な情報が収集、提供できるようなシステムが期待される。具体的には、内外の幅広いデータベースを利用しての情報提供サービスである。

図書館勤務中は、教職員、特に図書館職員の皆さんには大変いろいろお世話になりました。大学図書館が、大学における心臓と呼ばれるにふさわしい存在であり続けられますよう、益々のご発展をお祈りいたします。

(いまなが よしずみ：前情報サービス課長)

## お知らせ

## ○大学祭期間中の開館

11月9日(水)～12日(土)

9:00～21:00

※この間1階学習室は閉室

## ○冬季休暇中の開館時間および休館日

12月26日(月) 休館

27日(火) 9:00～12:00

28日(水) } 年末年始休館

1月5日(木) } 9:00～21:00

6日(金)

7日(土)

※この間1階学習室は閉室

(1月9日から平常通り開館)

## ○冬季休暇中の長期貸出

(下記対象以外を除く)

学部学生、専攻科生

12月15日(木)～1月7日(土) 5冊以内

留学生別科学生

12月15日(木)～1月7日(土) 10冊以内

大学院生

10月26日(水)～11月19日(土) 20冊以内

いずれも返却期限は1月18日(水)

## ○卒業年次生へ

卒論用に別途3冊(1ヵ月)貸出中

卒業生(82期生まで)の卒論閲覧可能

(詳細は受付まで)

## ☆ 報 告 ☆

## 〈図書館委員会〉

○63.6.30 ①図書館電算化の進捗状況

○63.9.14 ①図書館業務電算化のその後の進捗状況

②図書館の増改築について

○63.10.18 ①私大助成金交付の内定について

②図書館電算化の進捗状況について

③個人研究費による雑誌購入の件

④図書館増改築について

## 〈研修・出張〉

○第49回私立大学図書館協会総大会・研究会

63.7.27～29 於：拓殖大学

今永課長出席

○昭和63年度九州地区著作権講習会

63.9.8,9 於：別府市

佐藤司書出席

○昭和63年度私立大学図書館協会秋季西地区部会

63.10.7 於：岡山市

大羽司書、古庄司書出席

## 〈本学開催の研究会等〉

○第4回九州EC研究会

63.7.2 於：学術研究所 25名出席

研究報告

①中村靖志氏(九州共立大学)「イギリス経済の停滞とサッチャー政策」

②山内良一氏(熊本商科大学)「家族複合経営の安定性—オーストリア・ベルグバウエルン経営を素材として」

③アリ・M・エリアグラ氏(福岡大学)「最近のEC情勢について」

○図書館実習

福岡女子短期大学から5名

63.7.4(月)～63.7.16(土)

## 〈人事異動〉

63.7.1付

渡邊浩之(整理課洋書整理係から)教務課へ  
佐藤 誠(教務課から)整理課受入係へ

63.10.1付

今永義純(情報サービス課長から)国際交流事務室長へ

篠崎 珣(国際交流事務室長から)情報サービス課長へ

## 〈表彰〉

昭和63年7月27～29日に拓殖大学を当番校として開催された私立大学図書館協会第49回総大会において、本学の今永前情報サービス課長は図書館20年勤続の功績を讃えられ、他大学の永年勤続者とともに表彰された。

## 編集後記

本格的な秋を迎え、いよいよ読書の季節の到来です。そこで皆さんの読書の一助になればと、特集を組んでみました。ぜひ、ご参考に。

ところで現在の図書館が出来て、今秋でちょうど20年。大きな節目を迎えた。今後とも図書館の充実のため努力していきたい。(F・T)